

# ともに育つ こどもたちの エピソード集

ともに暮らし 互いに支え合うまち 東松山の実現

東松山市地域自立支援協議会  
障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議

# 発刊に寄せて

東松山市障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議

会 長 水上 克己

東松山市では、障害のあるなしに係わらず「ともに暮らし、互いに支え合うまち東松山の実現」を合言葉に、分野ごとに取組みを進めてまいりました。

教育の分野では、平成19年に就学相談調整会議を設け、障害のある児童・生徒に普通学級や特別支援学級へ進むという選択肢を示したほか、多くの保育園、幼稚園が障害のある児童を受け入れるなど「ともに育ち、学ぶ」ための環境を整えて参りました。

私ども「障害のある子どもの育ちと学びを支える連絡会議」は、障害のある子どもが保育園・幼稚園・学校において「ともに育ち、学ぶ」ため、福祉、教育、保健などの関係機関同士が協力連携を図っています。

この度、地域の学校、幼稚園、保育園でともに育つ子どもたちの生活の中でのエピソードを集め、小冊子にいたしました。ぜひご一読いただき、ともに育つことの意味に想いを馳せていただければ幸いです。

## 目次

<b>就学前</b> .....	1
～ 保護者から ～.....	1
～ 先生から ～.....	3
<b>小学校</b> .....	8
～ 保護者から ～.....	8
～ 先生から ～.....	10
～ 地域の方から ～.....	12
<b>中学校</b> .....	14
～ 保護者から ～.....	14
～ 先生から ～.....	16
<b>座談会</b> .....	19

※ このエピソード集に記載されているお子さんの名前は、すべて仮名で表記しております。また、掲載しているイラストは市内の小中学校の特別支援学級に通う児童・生徒より提供いただきました。

# 就学前

---

## ～ 保護者から ～

ミーちゃん母

娘は自閉症で人と関わるのが苦手です。  
言葉も話せないので、一人で遊んでいることが多いです。  
でも、保育園に入って、お友達と関わっていく中で、少しずつ様子  
が変わってきました。

先日、先生が「ミーちゃん、お友達と追いかけてっこしていました  
よ。」とおっしゃったので、びっくりして「追いかけてっこですか？」  
と聞き返してしまいました。

詳しくお話を伺うと、お友達が追いかけてきたので娘が逃げたそ  
うです。そして立ち止まり、振り返ってお友達がまた追いかけて来  
てくれないかと待っていたそうです。

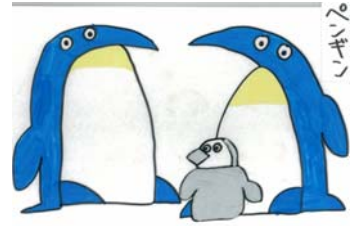
保育園に入るまでは、人と遊ぶことなんてほとんどなかったので、

娘の成長にとっても驚きました。

最近では娘もお友達と遊ぶと楽しいとい  
うことが分かってきたようです。



幼稚園 ゆうちゃん母



生まれつき重い病気を持ち入退院を繰り返してきたゆうちゃん。

大きな手術もつらい治療も乗り越えてきました。がんばり屋のゆうちゃんだけど何度もされる採血が大嫌いで、その度泣き叫び大暴れ。ベッド上にタオルでグルグル巻きにされ動きを封じやっとな採血。頭までビショビショの汗だくになる事もしばしば・・・大変でした。

そんなゆうちゃん、4歳の誕生日を迎えた翌日の外来でまた採血がありました。

その日はお休みだったおねえちゃんが一緒にウキウキでした。

看護婦さん達に4歳になったことを報告し、おめでとうと言われ嬉しそう。「ゆうちゃん、4才のお姉ちゃんになったからイスでチックンできるから見てて！」といい出し、私もドキドキでしたが、針が近づいてくると、大きな声でイテッてててテッテテ！！と言い、目を瞑りチクリ。

「ハア～できたあ～」と笑顔。

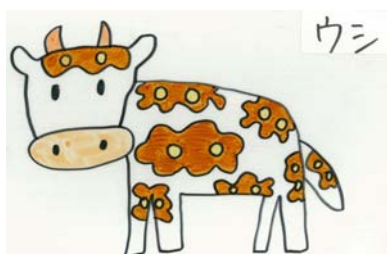
近くにいたおねえちゃんに「泣かなくてすごかった？」と。4才になった喜びとおねえちゃんに良い所を見せたかったのでしょう。

それからはイテッてててテッテテ！！のおまじないの様なかけ声で採血がんばっています。



## ～ 先生から ～

幼稚園 ゆりちゃん担任



ウシ

「♪♪<sup>なないろ</sup>七色のレインボー♪」

ブランコに乗ると目を閉じて気持ちよさ  
そうに歌い始めます。

ブランコがとまりそうになると、「先生押  
して。」そんなふうに一人遊びが大好きなゆりちゃんのある日の事。

「いれて。」「いいよ。」「ゆりが鬼ね。」自分で役割を決めます。  
いつの間にかそんなやり取りができるようになり、かくれんぼが始  
まりました。

「1、2、・・・30。」「もういいかい。」ゆりちゃんが探しはじ  
めます。

でも間もなくゆりちゃんの気持ちは迷子になり、違う事に興味を  
持ってしまいます。お友達は、隠れるのをやめてゆりちゃんを探し  
ます。

「ゆりちゃんみ一つけた。」みんなは、「さかさかくれんぼになっ  
ちゃったね。」笑いながらゆりちゃんの周りに集まってきました。  
誰一人文句を言わずほのぼのとした瞬間でした。

「今度はだるまさんがころんだね。」「ゆりが鬼ね。」

少しずつみんなで遊ぶことの楽しさを味わっているゆりちゃんは、  
今日もみんなの輪の中で笑顔がいっぱいです。

市立保育園 保育士



こんなことがあった。

年中年長に入り、けじめを教える段階。

朝の会が始まる前に、皆が静かにいすに座っている時、立ち上がって、たっちゃんが出歩き始めた。

子どもの中には、たっちゃんは時々出歩いちゃうなと認識できている子もいるが、自分も出歩きたい子もいる。

そんな中で、たっちゃんがピアノを「じゃじゃじゃーん」と叩いた。

「たっちゃん、うるさい!」「たっちゃん、座って!」と言う子がいた。でもちょっと待って、これはたっちゃん存在を、子どもたちに共有させてもらえるようにするチャンス!と思った。

担任と話して、「たっちゃんは、リズムがやりたいみたいね、先生。」  
「そうみたいね」と話していると、子どもたちが手拍子を始めた。  
じゃじゃじゃーんが止まった時に、「今ストップなんだって。」と声をかける。

「たっちゃん上手だったね。ピアノのリズム。」そういう話をしたら、たっちゃんがみんなの身近な存在になった。

あっちゃんは、食缶を運ぶ時についてきてくれた。

小さいクラスを通った時、お友達の唐揚げを食べてしまった。

びっくりしている子どもに「あっちゃん、黙って食べたわけでは

ないの。ちょうどしたんだけど、気づかなかったからいいかなと思って、食べちゃったんだ。ごめんね。」と話すと、

「そうなんだ。いいよ。」と言ってくれた。

その子には「びっくりしちゃったし、食べられちゃったから嫌だったけど、我慢してくれてありがとう。」とその子のとった行動を認め、あっちゃんのこのポーズは、『ちょうどい』だからよろしくね、と言葉をかけた。



障害のない子どもたちが我慢したり、優しい気持ちを持ったりを自然に出せるのはいいことだと思う。こういった行為が自信へとつながり、障害をもった子と共に生活する微笑ましい現実になって来る。

シーンとして、お昼寝ができるころになってくると、障害のある子どもが眠れず、アー！ウー！などの声が響くことがある。

他のクラスの子どもの中には、オヤッ？と顔に出す子がいる。クラスの子どもたちにとっては、こもりうたのように気持ちのいい声。

2学期を越えるとみんな眠れる。心で受け入れているからだと思う。受け入れているから、自然な眠りにつけるのかな。

年長児になると知恵遊びに差ができる。

すぐに理解できる子はどんどんできる。ルールがわからなくて、うまく遊べず、いけないことばを言ったりする、じゅんちゃん。



ジャンケンがうまくできず、遊びの中に入れなくて、しょっちゅう鬼になってつまらないと言ってきた。

「おにになって嫌だったの?」「めぐちゃんも混ぜて」と一緒に遊び始めると、すぐに車いすのめぐちゃんにタッチ。

車いすを押してじゅんちゃんを追うが、すぐにつかまらない。

逃げ切ったじゅんちゃんはめぐちゃんに心癒され、安らぎを得、自信を取り戻す。

めぐちゃんは歩けないし、言葉もしゃべれないけれど、こういったさりげない遊びでも、ともに育っていると強く感じる。

朝元気のない子どもがいた。「家で何があったかわからないけど、めぐちゃんを見てごらん。いつもニコニコしているよ」子どもの表情がぱっとほぐれる。

切り替えがへたなたかちゃん。

「ホール行かない」と言う。「めぐちゃんの手押し車を押して一緒に行こう!」と声をかけると、気持ちを切り替え、車いすを押してホールに行く事ができた。

「たかちゃん、先生にやってもらっていること多いけど、めぐちゃんのお手伝いしていてすごい!」とまわりの子。障害を持っている子ども同士での係わり合いの中で、育ち合っているのがわかる。

お手紙ごっこをした。ともだちが書いた手紙。車いすで走れないはずのめぐちゃんが走っている絵が描いてあった。

お母さんに見せた。「ママみて！めぐちゃん走っているんですよ！めぐちゃんはお友達にとって一緒に走っているお友だちなんですよ！」と伝えると「すごい！」と嬉しそうだった。

お母さんもめぐちゃんの成長を楽しみに感じてくれるようになってきた。

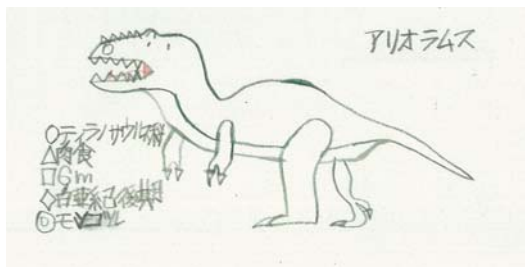
また、ある日「今日ね、めぐちゃん疲れているんだって。」母親と先生の言葉を聞いて、子どもが友達に伝える。

同じ部屋で生活することによって、大人が反応する言葉や態度を真似て、優しい声かけ、関わりを覚えていく。

共に生きるって健常児が障害児を助けるだけでは決してない。障害の子から受ける勇気とか優しさとか、すごく大きい。

みんな社会に生きるのが一生懸命すぎるので気づきにくいだけ。保育士や友だちの関わりをみて、子どもたちは気付いていく。気づかない時には、気付かせてあげるきっかけを作ってあげるようにしている。

障害のない子どもたちだけの集団ではなかなかできない関係性がある。めぐちゃんクラスにいてくれてありがとう。



# 小学校

## ～ 保護者から ～

こうちゃん 母

小学校入学にあたり、自閉症である我が子は、先生やお友達に助けられてばかりの6年間になるであろうと思っておりました。

ある時、我が子の交流学級のお友達が、私にこんな話をしてくれました。

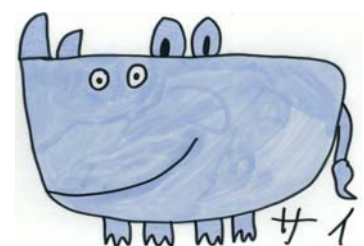
「こうちゃんはこちらへ勉強に来る時、“みんな、おまたせー”と言いながら教室に入ってくるの。いつも、みんな、こうちゃんが来るのを楽しみにしているよ。

この間は、前の時間、先生がクラス全員を怒って教室が暗い雰囲気だったんだ。だけど次の授業で、こうちゃんがいつも通りに、“みんな、おまたせー”と明るい声で教室に入って来たので、みんなも笑顔になったよ。」

この話を聞いた時、いつもお友達に助けられている我が子が、こんな形でクラスの雰囲気を和ませられたことをとても嬉しく思いました。

我が子を理解し暖かく受け止めてくれるお友達がいる学校。

そんな小学校が大好きな我が子です。



## たけちゃん 母

交流保育が始まって、初めて外遊びをした時のエピソードです。

園庭の木から一枚の葉っぱがたけちゃんの上に舞い落ちてきました。  
た。

私がそれをたけちゃんに見せていると、「たけちゃんのお母さん、何してるの?」と聞かれたので、「たけちゃんね、今まで大きな病気をたくさんして、あまり外で遊んだことがなかったから、今落ちてきた葉っぱ、見せてあげていたんだ。」と答えました。

それを聞いたとたん、たくさんのお友達が手にいっぱい宝物を持って駆け寄ってきてくれました。

「これは大きい葉っぱ。こっちは小さくてツルツルだよ。」

拘縮しているたけちゃんの手をそっと持って触らせてくれます。

「石もあるよ。かたくて痛いね。」「これは枝だよ。持てるかなあ…。うわー!!たけちゃん、ここの親指でギュッと握ってくれた。ちゃんと枝持ってるよ!!」

新しいお友達は、ストレッチャーに乗っていて、座ることも言葉を話すこともできない子。きっと不思議でたまらなかったと思うのですが、あっという間に触れ合えて、仲良しになって、たけちゃんが一番良く動かせる体のパーツまで、わずか数分で発見してくれました。子どもって本当にすごい!!

こんなお友達と、これから一緒に育っていくんだ…と思ったら、嬉しくて嬉しくて、希望がいっぱいあふれました。

## ～ 先生から ～

市立小学校 教諭

あいさんの交流授業でのエピソード

あいさんは、人一倍不安感が強いので、初めて交流学級の中に入るのがとっても勇気のいる事なのです。

そのため、事前に交流先の担任や学級の友だちに、あいさんのことを紹介しておきました。

あいさんの初めての交流授業（音楽）のことです。

交流学級の廊下に行くと、男の子と女の子が来て、

「あいさん、一緒に音楽をしましょう。」と、あいさんの手を取り、案内してくれました。

あいさんは、にこにこしながら、教室へ入って行きました。

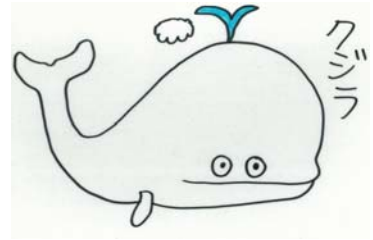
「あいさんの席はここです。どうぞ。」と、席の近くの友だちが椅子を出してくれました。

交流先の担任や友だちが、「あいさんが来るのを楽しみに待っていました。」とあって、迎えてくれました。

それから、交流授業を積み重ねていく中で、あいさんはスムーズに交流が出来るようになりました。

市立小学校 教諭

『パソコン入力は、ぼくにまかせて！』



自閉症のえい君は、小学校の一年生。

まだ言葉も流暢に話せない男の子でした。

同じクラスにパソコンが大好きな6年生の男の子のてる君がいました。

私は、“これからの時代、パソコンが生きていく上での有効なツールになる”と思っていたので、できるだけ毎日パソコンに触れられるようにしました。

タイピング練習、手紙や招待状作り、ロールプレイングゲームタイプの教科学習、・・・など。いつも子どもたちは、やめさせなければ一日中やっついそうな勢いです。

4年生でローマ字の学習が済んでいるてる君には仮名入力でなく、ローマ字入力のタイピング練習をさせていました。

それを見ているえい君の様子から“興味があるのかな？”と思い、ローマ字入力をさせてみました。するとどうでしょう。みるみる上達し、一年生の3学期には私より速く入力できるようになってしまいました。

自閉症の人は、天才的な能力を発揮することがあります。

今や中学生になった、えい君のこれからの活躍が見ものです。



## ～ 地域の方から ～

放課後児童クラブ 指導員

この放課後児童クラブには、小学1年生から3年生までの児童約65人が在籍しています。

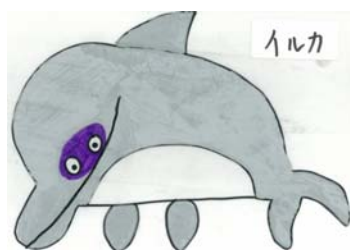
我がクラブの一員、しょうちゃんは脳性マヒで、他の子と同じ様にお話したり活動したりする事ができませんが、いつも皆の人気者です。

車イスに座っていると絵や折り紙のプレゼントが届き、お布団でリラックスしていると音の出る絵本を持ってきてくれたり添寝をしてくれたり。外遊びの時は「お庭を散歩しよう。」としょうちゃんのバギーを押してくれます。

季節ごとの工作では、自分で作る事の出来ないしょうちゃんの分を、お友たちが作ってくれ、しょうちゃんはニコニコ。しょうちゃんの周りにはいつも愛と優しさがいっぱいです。

お友だちの動きや話しかける声で、しょうちゃんは色々な刺激を受け経験をして成長しています。

また、周りの子どもたちも、しょうちゃんがいてくれるおかげで「障害のある子とともに育つ」貴重な体験を通じて、ごく自然に優しさや思いやりの心が成長しています。



## 見守り隊

高橋さんへのインタビューより

みぞれ混じりの午後 2 時 30 分。今日も見守り隊の高橋さんは、小学校近くの街頭に立つ。

平成 16 年からずっと、自治会活動で下校時の見守りを続けている。

みんな一緒に帰っていく。みんな仲がいいんだ。あいさつしたり、いたずらしたり。車いす押してあげたり。

障害があるとか、外国籍とか関係ない。どの子もいい子。みんな同じ、新宿小の子。

お話できない車いすの女の子、機嫌がいいと、顔を上げてにっこりしてくれる。

「今日は元気だねー！」と声を掛ける。お母さんに送ってもらって登校していた女の子。少しずつ距離を伸ばして一人で通えるようになった。今日も元気に帰っていく。

現在、特別支援学校に通っている男の子。卒業式の日、一緒に 2 ショットの記念撮影。写真をお手製のカードにしてプレゼントしてくれた。

卒業生も横断歩道を渡っていく。声を掛けるとちょっと照れて会釈していく。一時停止した車の運転手さんも笑って答える。

「みんな顔馴染み この街に住む人たち」

# 中学校

---

## ～ 保護者から ～

カイ君 母

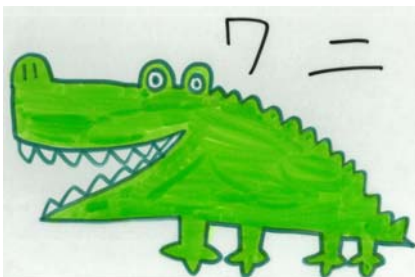
自閉症の息子カイは中学 2 年生になりました。  
学校公開日に体育の授業を見た時も、足の遅い息子が、みんなについて走れるように、そっと背中を押して走ってくれている男の子がいます。

街中で、カイを見かけた女の子達が「あ、カイちゃんだー！」と手を振ってくれます。

みんながそっと手を貸してくれる。どうしてだろう？私は考えます。

学校では、毎朝校長先生が支援学級の様子を見にきてくださいます。

支援学級の先生が、周りの子供達、先生方にもカイを理解してもらえるよう、いつもサポートしてくれています。



他の先生方も、普通にカイに挨拶してくれて、仲間に入れてくれて、それを見た子供達が、自然に声をかけたり、手助けしてくれます。

学校行事に参加すれば、「カイちゃんががんばってたね～」たくさんのママさん達が、カイの成長と一緒に喜んでくれます。

「今度、体育祭でカイちゃんの伴走するっていうから、ウチの子に『いつもカイちゃんの視界に入って慣れてもらおうんだよ』って言うてるのよ～」と、私の知らないところで、サポートしてくれるたくさんの保護者の方たち。

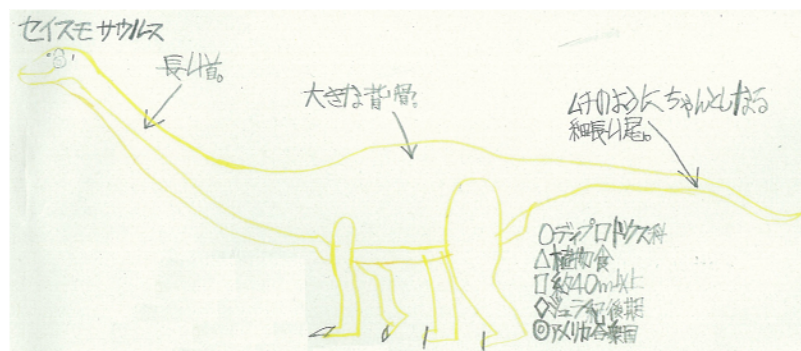
毎朝一緒に歩いて登校していると、小学校からのウォーキングファミリーの方々が、「大きくなったねえ」と声をかけてくださいます。

夕方、毎日カイとジョギングをしていると、ご近所のたくさんの方達が「毎日がんばってるね～」と声をかけてくださいます。

カイは幸せ者です！

先生、子供達、保護者の方、地域の皆様、ともに生きる事を目指して支えてくださる行政の方々。たくさんの方々のお力をいただいて、今のカイがあります。

たとえ障害を持って生まれても、周りの理解があれば幸せに生きられる。今、改めて思うのです。



## ～ 先生から ～

A 君の学校生活 ～周囲との自然な関わりを通して～

中学校特別支援学級担任

現在、中学校 2 年生の A 君。

自閉症の彼はいつも笑顔の頑張り屋さんです。

中学校入学当初は、やはり今までとは全く違う環境の中、時に大きな声が出てしまったりしたこともありましたが、そんな時も小学校から一緒だった同級生たちがいつも優しく声をかけてくれました。

朝の登校時や校内でも自然に「Aちゃん、おはよう！」の声、そしてハイタッチ！それも何人もの子どもたちが笑顔で。

小学校の時から A 君とごく当たり前に過ごせていた様子を実感しました。

そんな様子は今も変わらず、先日訪れた京都への修学旅行先でも A 君を見つけると「一緒に写真撮ろう！」と何人もの生徒が声かけてくれました。もちろん A 君も自然にその中に。

— 去年の校内合唱コンクールでは、こんなことがありました。  
交流授業の音楽での練習中、教えている私が曲の盛り上がる前で「せーの！」と合いの手をいれることがあったのですが、もともと歌を聴くことや歌うことが大好きで耳のいい A 君は、その部分をしっかりとインプットしてしまったのか、なんと本番でのその部分、それ

もドンピシャのタイミングで、会場中に聞こえるほどの「せーの」のかけ声！

聴いていた私は、正直ひやひやものでしたが、歌い終わった後クラスみんなの感想は違ったものでした。

「あの声で緊張がほぐれた！」「なんだかすごく盛り上がった」などそんな声がたくさんコンクール後に書いた感想に書かれていて、ほっとしました。(ちなみにその声はしっかり実況録音のCDにも入っていて後の授業の時、再度みんなで聴いて盛り上がりました。でも本人は素知らぬ顔でしたが・・・)

ほかにも、毎日交流クラスで行っている掃除当番でのこと。

本校では、学期ごとにクラスで一番掃除をがんばった人がクラス全員の投票で決まり、学年全員の前で表彰されるのですが、その第1回にクラス代表としてA君が選ばれました。

黙々と自分の分担をこなすA君の姿、周りの子どもたちはみんなしっかりと見てくれていて、そして認めてくれたこと、担当としてすごく嬉しかった！

こうしたA君のエピソードは他にも山ほどあります。

けれども、そのどのことにも共通していることは、A君の存在がこの学年の中ではとても自然であること、小学校が違う仲間もちゃんと彼のことを認めてくれているということです。



この2年間でA君はいろいろなことができるようになり、心も体もすっかり大きくなってきました。

そんなA君のこと、これからも周囲の仲間が理解し、特別な存在ではなく、ごく自然な存在でいてほしいと心から願っています。

# 座談会

---

## 参加者

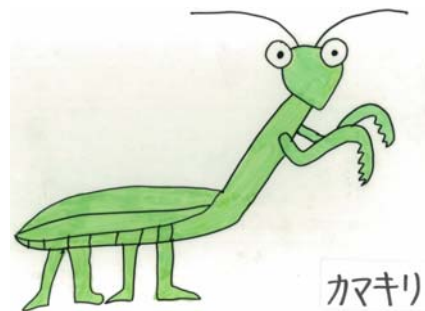
司会 （社福）東松山市社会福祉協議会 総合福祉エリア

第二なかよし保育園

東松幼稚園

まつやま保育園

ひさみ幼稚園



## ひさみ幼稚園

あっちゃんは、多動だった。

初めての集団生活。新しい生活にどうしたらなじめるか、何が好きか考える。

あっちゃんはマリオが好きだった。

マリオの場面をカラーコピーしてラミーしてクラスに置いた。

周りの子もくいつき、マリオカートごっこが何人かで始まった。

これがきっかけだったかもしれない。マリオになって遊ぶ。

今は一緒に砂場にも行く。うちの子が嫌われないかと家の方は心配する。そんなこと無い！！と、連絡帳に書いた。

「えみちゃん、言葉が話せないあ。なんでしゃべれないの？」とクラスの子どもが聞くので「練習中だからね。」と答えている。

えみちゃんが「パッパ」と言うと、「パパって言ったよね！」と周りがその子の小さな変化に気づく。

風を切る遊びが好きで、特に部屋の回転椅子が大好き。ぐるぐる回る様子を見て「姫みたい！」と言った子がいた。友達が押して姫ごっこ。「今笑ったよね!!」小さな表情の変化も読みとってかかわった。

かんちゃんは、発達障害があると言われていた。けいくんと波長が合う。

(かん)「クイズ！ぼくが好きな東京タワーって何でしょうか！」

(けい)「スカイツリー！」

(かん)「正解！」「次の問題！ぼくの好きな踏み切りはなんでしょうか！」

(けい)「普通の踏み切り！」(かん)「正解！」

波長が合う子にはよくわかる。2人のやりとりがおもしろい。年長でも同じクラス。友達関係を築けた。自分のことをわかってくれる友達。

きくちゃんは耳から情報をインプット。自分でつぶやいてインプット。

「1.手を洗う。2.帽子を取る。3.トイレに行く」

周りの子も「1.〇〇するんだよね。2.〇〇するんだよね。」と一緒に確認。

数字に強い子だったので「2人休みだと今日は何人来てる？」とたずねると、きくちゃんが答えるのに刺激されて、まわりの子も答

え始めた。

数の勉強のきっかけつくりしてくれた、きくちゃんだった。

## まつやま保育園

さっちゃんは、自分で座ったり歩いたりできない。機嫌がいいと「あー」とか「うー」とかお話ししていた。

歩行器に乗ったとき、女の子が呼んだら前に進んだ。かわいい女の子だと進んでいく。男の子や先生にはちっとも来ない。

入園したとき1. 2歩しか進まなかったのに、卒園の頃は園庭の端から端まで進めるようになった。

しんちゃんは、知的な障害があって吸引という医療的ケアが必要だった。

入園したときは歩けずハイハイをしていた。初めは3歳だけど2歳児クラスにいた。

まもなく同年齢のクラスに戻った。

「水筒持ってきて」と言うと、みんなの様子を見て、ハイハイで取りに行った。

環境が変わるとやりたい気持ちが芽生える。給食を配ると、いただきますの前にすぐに食べてしまったが、今は待っている。

お当番の時はみんなが静かになるまで待つてから、「ちゅん！」とあいさつする。

経管栄養<sup>1</sup>の子どもたち。保育園で初めて受け入れたすーちゃんは、お友達がいたずらしないか心配で、先生のお部屋で注入していた。秋ごろからやっとみんなのいるお部屋で行った。

2年後に、経管栄養2人目のたっちゃんが入園した。先輩すーちゃんが注入していたのを見ていた在園の子どもたち。初めからたっちゃんの食事のとり方を理解できていたから、みんなと同じお部屋で行なうことができた。学年が違って毎日一緒だったから、大人が教えなくても経管栄養のこと、ちゃんと理解できていた。



せっちゃんは、視覚に障害があった。友だちに近い距離に顔を近づけるが、嫌がる友達はいない。「せっちゃん病気なんだよ。」という子がいた。「違うよ。かぜひいてない。元気だよ。」と答えると「そうなんだ。」と納得している。へたに大人が説明し過ぎない方がいいのかな。それで友達は納得する。

そらちゃんは、まだ1人で歩けない。でも、運動会のリレーの時に、負けるもんかと歩行器使いながら、後ろから来るお友達を気にして走った。勝ちを明らかに意識していた。バトンもちゃんと渡した。

---

<sup>1</sup> 障害などの理由により経口摂取ができない場合、体内に通したチューブ用いて流動食を注入する。

## 東松幼稚園

ちえちゃんは、足が弱くて補装具をつけていた。お話もできない。「年長さん〇〇をやりますよ。」で、自分のことだと思って動き出す。見た感じは小柄で、5歳児だが3歳児もお世話してくれる。でも、本人は拒否!!自分の意思がはっきり見える。子どもたちも「ちえちゃん、嫌みたい」と読み取っている。

つーちゃんは、視覚障害があった。

ほっぺをつけてテレビを見る。乗り物が大好き。工作好きな子2人が紙飛行機をたくさん作って、飛行場を作り始めた。

「飛行場作ってんの？」

「そうだよ。」

「見えないのに何で知っているの？」

「行ったことあるよ。羽田」

「滑走路あるの？」

「なんで知ってんの？」

「作ろうよ!指令塔もあるよね!」

「何でしてんの?あるある!」

どんどん盛り上がってきた。「お店もあるよね!!」見えなくてもその世界で友達と遊べる。

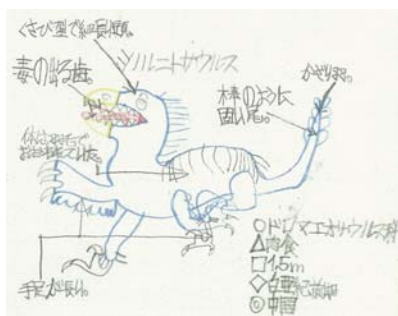
運動会のリレー。「どうしたらつーちゃんと一緒に走れるかな。」と聞いてみた。

「一緒に走ってあげる。」「手を引いてあげる。」といろいろな意見。「つーちゃん!お友だちが、いっしょに走ってくれるって」と伝えると、「僕一人で走る。」「どうしたら走れる?」「白線かいてくれた



ら走れる。白線の上を走るよ！」

つーちゃんは一人で走った。遅れが出てしまったが、遅れたことを批判する子どもはいなかった。頑張る姿に声援があった。お互いにとってとても良い経験だった。



## 第二なかよし保育園

とっちゃんは聞く力が弱かった。

職員は手話ができず、指文字の表を部屋張り、口話も取り入れた。子どもたちの吸収は早く、友だちが自分の名前を指文字で

言うようになった。とっちゃんはすごく嬉しかったようだ。

やってくれる友だちの名はすぐに覚えた。手話の歌もみんなで覚えた。クリスマス会、卒業式でみんなで話し合っ、手話の歌をやりと決めた。

クラスの取り組みにできたこと事、良かったと思った。

なっちゃんには知的な障害があった。

リレー遊びの時、大人が何も言わずにやった。なっちゃんは、ちゃんと走り出したが部屋に行ってしまった。負けてしまった。「なっちゃんがお部屋に行ったから負けちゃったんだよ！」という子がいた。他の子が「そういうこと言っちゃいけないんだよ！がんばったんだよ。次はちゃんと走ってくれるよ。」と言った。「ごめんね。」と叱られた子が謝った。

このやりとりをなっちゃんも真剣に聞いていた。その後はなっち

ちゃんも一生懸命走ってくれた。

なっちゃんは、歌が好きでリズム感がいい。年中の時、荒馬踊りもすぐに飛びついた。「ラッセラー！」と自分のものにした。なっちゃん中心にクラスに広がり、卒園式まで盛り上がった。

卒園式では馬を作って披露した。

なっちゃんからクラス全体へ広がって、年中、年長、卒園式まで、ひとつのものを組み合わせたのが良かった。

クラスで河童をテーマに遊んできた。河童の世界に入って遊びこんできた。なっちゃんも河童が大好きになった。

ある日お弁当を持ってぼたん園へ。職員のリュックがなくなってしまって、探してもらったら、おにぎりが食べられちゃった！

河童に食べられちゃったんだ！河童から「ごめんなさい」と手紙が届く。いいかっぱだったんだ！。なっちゃんも、お母さんも河童の世界楽しんでくれた。

お弁当もおにぎりでかっぱを持ってきてくれた。「なっちゃんのお弁当すごい！」とみんなが困んだ。本人もなかなか食べられなかった。色々な所に河童がつながって楽しかった。

なっちゃんは、体力が無くて、散歩もゆっくり。動かなくなる事もある。なっちゃんが好きな河童に職員になって追いかけると、元気が出て小走りになってみんなに追いつく。なっちゃんが中心になって、広がっていった河童遊び。

## ひさみ幼稚園

障害のある子どもたちと関わっていて、大変だって思うこともあるが、他の子にないものをもっている。

自然にクラスを中心になっていることがあって、周りの子どもたちがそういう雰囲気をつくってくれるとあらためて思った。

表現遊びの会の時に、かんちゃんに障害があると知らないお客さん、「あの子はいいい味出していたね」と誉めてくれた。

園服が着れない。教室に入れない、一瞬でどこかに行ってしまう子だった。名札もとろうとしていた。ひとつひとつ乗り越えて、12月にはマイクを持って1人で演じた。センターで歌ったり踊ったり。みんなも「それでいい」という暖かい雰囲気だった。



## 第二なかよし保育園

のんちゃんは人とコミュニケーションをとるのが苦手だった。

高いところや箱の中が好き。箱が4個重なっている時は乗ってはいけないルール。

のんちゃんはみんなの興味を引く事を一番にしてくれる。全部だめとは言わず、少し低くしてみんなで遊べるようにした。

## ひさみ幼稚園

入園して、お父さんお母さんの表情がだんだん良くなっていく。入園の4月には、声をかけるのもどうしようかと思う硬い雰囲気。運動会など行事重ねていくと、表情良くなり子どもの成長感じてく

れる。お父さんお母さんは私達の想像以上に苦労していると思う。診断書にばん！と書かれている障害名。

これを園に持ってきてくれる覚悟はすごい。すごいプレッシャーを受け入れてくれていると思う。預かる身として引き締まる思い。「とことんやらさせてもらいます。」と言いたい気持ち。

「広汎性発達障害と言われた」といって泣かれたおかあさんがいた。園に入ってお母さん変わった。セミナーに行ったり、お父さんも行事に来てくれた。

「子どもが変わってくるのを目の当たりにすることで、心が軽くなる。

話せる人がなかなかいなかったけど、先生と会えて話せる人ができた。」と言ってくれた。「聞くことで楽になるのであれば何でも言ってください」と言った。

話してくれる事を嬉しく思ったり、どうしたらいいのだろうと考えたり、勉強させてもらっている。

## まつやま保育園

ひさちゃんは医療的ケアが必要だった。体重10キロ。5歳だが首がすわっていない。視力があるかわからない。

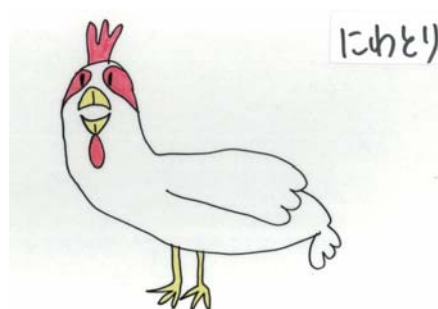
保育園に入って、名前を呼ぶと、目を上に上げるようになり、やがて手をあげるようになった。お母さんは「偶然だと思う。」と言っていた。

聞き慣れない園長の声を聞いて泣いた。よくわかっている。

ある日「お母さんがお迎えに来たよ！」お母さんが「ひさちゃん！」と呼んだ時、「ひゃー」と嬉しそうな大きな声を出した。「わかるんですね!!」おかあさんとっても嬉しそうだった。

## 第二なかよし保育園

ひーちゃんは自閉傾向があるといわれた。ずっとお母さんと離れたことがなかった。



2歳で入園。母と離れて後追いして泣いた。「初めて母親の自覚が沸きました。私は母親なんだって実感できました。」と嬉しそうだった。

みっちゃんには障害があった。

お母さんから下の子を妊娠して悩んでいる。と聞いた。とっさに言葉が出ない思いだった。みっちゃんのためにも生んだ方がいいと勧めた。まもなく女の子が生まれた。お兄ちゃんになってみっちゃんも変わった。生んでよかったとお母さんは言ってくれた。障害のある子を育てるという思い。

## まつやま保育園

生まれてから、親子だけでずっと一緒だと、命を守る日々の中で母親としての気持ちを見失ってになってしまう。

保育士や看護師のケアを受けて初めて母親という感情を取り戻せる。園は「もうひと頑張りしよう」というお母さんの気持ちを支える役割があると思う。





ともに育つこどもたちのエピソード集

発行：平成25年3月  
編集：東松山市地域自立支援協議会  
東松山市子どもの育ちと学びを支える連絡会議  
事務局：東松山市役所健康福祉部障害者福祉課